

～冒険心なくして研究なし～

夢のみずうみ村 半田 常之

明日から朝食は、「カスピ海ヨーグルトときなこ」で決まりだ。

あっ、という間の90分だった。

家森先生は、実に楽しそうに講義をされていた。そんな先生の雰囲気になんと飲み込まれ、あっ、という間に時間が過ぎた。

研究とは冒険と同じなのだろう。

好奇心という思いに駆り立てられ、思いのままに突き進む。その先にゴールはなく、目の前の目的に向かってひたすら挑戦する。そんな冒険心こそが研究者の資質なのだと考えさせられる講義だった。

研究に対する情熱、そして「伝える」ことへの熱意。

研究者とはこういう姿でなくてはいけないと気づかされた講義だった。エビデンスをあらわにすることだけが研究者の役割ではない。データを得ることは研究者としてとても大事な事だ。しかし、そのデータをいかに‘HOW TO’をもって社会にフィードバックできるか、そこが非常に重要であると同時に、まだまだデータのみが蓄積され、データを実践へとステップアップする‘HOW TO’に乏しい現実がある気がしている。

本日のお話では、イソフラボン・タウリン・食塩、ガン・循環器疾患リスクというキーワードが研究成果より導き出されていたが、そうしたリスクの提示だけでなく、では、どういふ食生活の変化が必要か、日常からどういふ食材を摂取すれば良いのかということが実践的に提示していたため、すぐにでもやってみたい、明日から試してみようという思いに駆り立てられた。

思い返せば子供の頃は、初めて見るモノ、触れるモノに強く興味を持ち、新たな発見があると誰かに話をしたくてしょうがなかった気がする。

家森先生のお話は、そんな童心のような輝きのある表情としゃべり口調だったと感じた。

得たエビデンスをいかに社会へ伝え、そして認識してもらうか。そのためには、聴く者を惹きつける話術も必要なのだろう。

家森先生のお話に吸い込まれ、明日から我が家の家庭の冷蔵庫には、洋風から和風へと逆文明開化することだろう。

さて、さっそく24時間営業スーパーへ行って「ヨーグルト」と「きなこ」を買ってこよう。